第九章　薫の物語　宇治で浮舟に出逢う

［第一段　四月二十日過ぎ、薫、宇治で浮舟に邂逅］

*賀茂の祭など、騒がしきほど過ぐして（賀茂の祭などの忙しい時期が過ぎた）、二十日あまりのほどに（四月二十日過ぎに）、例の、宇治へおはしたり（例のずっと気になっていた宇治の山寺へ薫殿はお出掛けなさいました）。　*「賀茂の祭」は注に＜四月の中酉の日に催される。＞とある。葵祭り。夏の話題。姫宮の嫁入りは「四月朔日ごろ節分とかいふことまだしき先」（八章六段）だった。

造らせたまふ御堂見たまひて、すべきことどもおきてのたまひ（造らせなさっている御堂の進み具合を御覧になって、注意事項を確認なさり）、さて（それから）、例の、*朽木のもとを*見たまへ過ぎむが（例の「朽木の許」と自称した弁尼に会わずに帰り申しなさるのは）、なほあはれなれば、そなたざまにおはするに（やはり心残りなので、山荘の方にも足を向けなさると）、女車のことことしきさまにはあらぬ一つ（女車の簡素な装飾のものが一台）、荒らましき*東男の（荒々しそうな関東武士の）、腰に物負へる、あまた具して（脇差を貯えた者を多数従えて）、下人も数多く頼もしげなるけしきにて（雑用夫も多数居て威勢のありそうな様子で）、橋より今渡り来る見ゆ（宇治橋を今、此岸に渡って来るのが見えます）。　*「くちきのもと」は注に＜弁尼をさす。「荒れはつる朽木の--」歌（和歌 49-17、七章五段）を詠んだことに因む呼称。＞とある。　*「見たまへ」は注に＜「たまへ」は謙譲の補助動詞。薫の弁尼に対する謙譲表現になっている。＞とある。ハ行下二段活用である謙譲語「たまふ」の連用形なので敬語ではない、という見解なのだろう。が、この「たまへ」は、四段活用である尊敬語「たまふ」の已然形で、下に完了の助動詞「り」が付いた言い方の「たまへり」の未然形「たまへら」に、打消しの助動詞「ず」が付いた「たまへらず」に、経緯推移を示す接続助詞「て」が付いた「たまへらずて」の慣用短縮形「たまへらで」という言い方が、続く「過ぎむ」という削除意志表現の強さの前で、重複否定となる「らで」が省かれた推移修辞項化されて、「たまへ」になっている、とは考えられないだろうか。まぁ薫殿の下心を思えば、絶対に丁寧表現ではない、と言い張るのも気が引けるので、謙譲意と尊敬意とを併記して置く。　*「あづまをとこ」が本当に常陸の地男たちなのかどうか、出で立ちだけなのか。ただ、一概に都でわざわざ田舎ぶる者など居る筈が無いと思うのも早計な気がする。田舎者＝粗野・野暮、という価値観は厳然としてあるだろうし、それが都の権威でもある訳だが、その天下の社交場たる京に、関東から一団を率いて遣って来る外交官が示す、それを可能足らしめる地域経済の財政的な豊かさは、言葉以上に社会の発展を予感させる高揚感を京都人に印象付ける。場合によっては、地方の優れた伝統文化を万民に知らせる機会になるかも知れない。私もこの場面演出にはまんまと乗せられる。

「田舎びたる者かな（田舎者みたいだな）」と見たまひつつ（とその一行を流し見なさると）、殿はまづ入りたまひて（薫大将殿は先に山荘にお入りになって）、御前どもは（ごぜんどもは、先払いなどの従者たちは）、まだ立ち騒ぎたるほどに（まだ御車の車庫入れに手間取っている時に）、「この車もこの宮をさして来るなりけり（この車もこの山荘に遣って来るようだ）」と見ゆ（と気付きます）。御*随身どもも（みずいじんどもも、護衛官たちも）、かやかやと言ふを制したまひて（不審がって緊張するのを、殿は制しなさって）、　*「随身」は古語辞典に＜平安時代、貴人の外出の時、弓矢を持ち、剣を帯び護衛として随従した近衛府の舎人（とねり、舎弟・公務員だが特定人物の指名専従者）。＞とあり、定員は＜大将には八人＞とある。

「何人ぞ（誰だ）」

と問はせたまへば(と尋ねさせなさると)、声うちゆがみたる者(声の訛った一行の従者が)、

「*常陸の前司殿の姫君の(常陸介の前任官の殿様の姫君が)、初瀬の御寺に詣でて戻りたまへるなり(長谷寺にお参りした帰りです)。初めもここになむ宿りたまへし(お参り前も此処にお泊りでした)」　*「ひたちのぜんじどの」は＜前常陸国司である主人＞という言い方だろうか。相手を右近衛大将と知っての口上なのか、普通の言い方なのかは分からないが、従者が主人のことをこういう言い方をする場合があったことだけは確からしい。

と申すに(と申すと)、

「*おいや(ああ、それは)、聞きし人なり(話に聞いていた人のようだ)」　*「おいや」は＜オヤ！＞と、あたかも意外な事態に気付いたかのような言い方だが、この日がこの姫の長谷寺参りからの帰る日だということは、事前に弁尼から知らされていたに違いない。従者の「初めもここになむ宿りたまへし」という台詞が、そのあたりの事情を語る筆致なのだろう。先に「朽木の許」と引いたのも、この場面を物語る際の背景説明で、その歌を弁尼が詠んだ七章五段の場面は、薫君が弁尼に、自分の故姉君への未練が妹君への横恋慕に成りかねず、妹君から異母妹の話を振られたので、その異母妹を故姉君の身代わりに出来ないと始末が悪そうだ、と暗示し、弁尼もその筋を理解して、自分が仲介の労を取らなければならないと承知し、弁のその心得に薫君も期待した、という内容であり、この接遇が弁の仲介の段取りによるものであることは、読者に前以て示されている。その上で、この場面を薫殿目線での語りで楽しむ、というのが素直な読者の観劇姿勢かと思われる。

と思し出でて(と薫殿は故姉君の異母妹の話を思い出しなさって)、人びとを*異方に隠したまひて(自分の従者たちを裏口の方へ回らせて目立たなくさせ為さって)、　*「ことかた」は漠然と＜他の場所＞と言っているのではないだろう。下に「北面になむ」とあるので、大将は自分の従者を北側の＜裏口＞の方へ回させて、目立たなくさせたようだ。

「はや、御車入れよ(早く御車を此処に入れなさい)。ここに、また人宿りたまへど(此処には他にも人がお泊りなさるが)、*北面になむ(親しい身内が北部屋を使いますので、気兼ねは御無用です)」　*「きたおもて」は身内が出入りする勝手口・通用門。

と言はせたまふ(と山荘の車係の侍から一行に言わせなさいます)。

御供の人も、皆狩衣姿にて、ことことしからぬ姿どもなれど(大将の供人たちも皆、狩衣装束で、仰々しくない軽装だったが)、なほけはひやしるからむ(やはり高貴筋の気配は目に付くのか)、わづらはしげに思ひて(関東勢一行は勝手が違うように思って)、馬ども引きさけなどしつつ(馬どもを引き寄せたりして)、かしこまりつつぞをる(遠慮していました)。車は入れて、廊の西のつまにぞ寄する(それでも車を邸内に入れて、中門廊の西の端に寄せます)。

この寝殿はまだ*あらはにて(この山荘の寝殿はまだ新築で調度品も揃わず)、簾もかけず(庇の間は簾も掛かっておらず、明るく見渡せます)。*下ろし籠めたる中の二間に立て隔てたる障子の穴より覗きたまふ(そこで薫殿は御簾を下ろして閉めきった母屋の二間を仕切ってある襖戸の穴から様子を覗きなさいます)。*御衣の鳴れば、脱ぎおきて(紗の御着物が鳴って煩いので、脱ぎ置いて)、*直衣指貫の限りを着てぞおはする(着慣らした上着と指貫だけを着ていらっしゃいま

す)。　*「あらはにて」は注に＜もとの寝殿を山寺に移して新築した寝殿。そのため調度類がまだ調わない。＞とある。　*「下ろし籠めたる中の二間」が分からない。「おろしこむ」は＜［動マ下二］御簾(みす)・格子などを下ろして、中に身をこもらせる。＞と大辞泉にあるが、訳文では＜格子戸を閉め切ってある＞とされている。となると、この「なかのふたま」は＜中央二間の南廂＞のことになりそうだ。が、庇の二間を衝立で仕切ったところで、東西から日が差し込んで、ちょっとした目隠しにはなっても、姿を隠し切るのは難しそうだ。といって、母屋の東部屋に隠れて西部屋を覗くというのも、近過ぎて、それこそ匂いが隠せなさそうだ。分からないが、一応、母屋に隠れていると読んで置く。　*「おんぞ」は＜御召し物＞の意味なら全体の装束のことだろうが、此処では着物の擦れる音を避けたようなので、夏の話でもあるので、堅い織りの紗の着物あたりを脱いだのだろう。　*「なほし」は平服とあるが、形状は袍と同様の上着だったらしい。

*とみにも降りで(車の姫君は直ぐにも降りずに)、尼君に消息して(弁尼君に人を遣って)、かくやむごとなげなる人のおはするを(このように高貴な人がいらっしゃるらしいのを)、「誰れぞ(誰が来ているのですか)」など案内するなるべし(など尋ねているらしい)。　*「とみにも降りで」の主語は異母妹姫らしい。場面としては察しも付くが、語りの語調として、上の薫殿を描いた文から主語を省いたまま対象を変えるというのは、何度も言うが、本当に分かり難い。

君は(薫大将は)、車をそれと聞きたまひつるより(その車を前常陸介女とお聞きになった時に)、

「ゆめ、その人にまろありとのたまふな(決してその人に私の素性を知らせるな)」

と、まづ口かためさせたまひてければ(と先ず口封じしていらっしゃったので)、皆さ心得て(玄関に迎え出た山荘の者も皆、左様心得て)、

「早う降りさせたまへ(早く御降りなさいませ)。客人はものしたまへど(客人はいらっしゃいますが)、異方になむ(別室で離れています)」

と*言ひ出だしたり(と妻戸口から車内に下車を促し申します)。　*「いひいだす」は室内から室外にものを言うことらしく、呼び掛ける、誘いかける、みたいな表現なのだろう。

［第二段　薫、浮舟を垣間見る］

若き人のある、まづ降りて、簾うち上ぐ*めり(若い女房の一人が先に降りて降り口の簾を上げたようです)。御前のさまよりは(先払いの関東者よりは)、このおもと馴れてめやすし(この女房は京風で和みます)。また、大人びたる人いま一人降りて(別の年配の女房がもう一人降りて)、「早う(さあ早く)」と言ふに(と言うと)、　*「めり」の推量表現は注に＜薫の視点による叙述。＞とある。見てはいるが、遠いので子細が分からず、全体の動きで事態を推量している、ということだろうか。しかし、薫殿に姫の車は見えているのだろうか。車は中門廊に着けられていると私は思っているが、仮に寝殿に近い西階段というものがあって、其処に着けられていたとしても、もし薫殿が御簾内の母屋にいるなら、遠いと言うより、建物構造から取れる配置関係からして、車は視野に入っていないのではないか。仮に薫殿が庇の間に隠れていたとしても、縁側へ身を乗り出さないと廊下は妻戸の先にあり、視野に入らないはずだ。であれば、此処にある乗降場面の子細はおろか全体の動きも分からないし、それこそ遠いので気配や音や声さえ聞こえないか、聞こえても具体事情など察知し得ない物音だろう。此処の文は、強いて言えば弁の目線あたりで、一行の様子を読者に伝えて興味を繋ごう

とする女房語り、とは即ち地文なのだろう。薫殿は実際の姫の様子は分からないが、およその車の乗降に要する時間は読めるだろうし、やがて姫が隣室に遣って来ることは分かっているので、此処に描写されるようなことを想像しながら、実は御簾内でじっと待ち構えていたのではないか。そういう意味では、此処の文は薫殿の目線での語りではないものの、薫殿の期待や興奮は、まるで実際の姫の降車場面を見ているような気分だった、と説明している語りではあるのかもしれない。私にはそういう舞台設定が合理的な解釈に思えるので、そう読んで置く。

「あやしくあらはなる心地こそすれ(弥に明け透けに感じます)」

と言ふ声、ほのかなれどあてやかに聞こゆ(と言う声が小さかったが上品そうに聞こえます)。

「例の御事(またいつものようにそんなことを)。こなたは(此方では)、さきざきも下ろし籠めてのみこそははべれ(先だっても締め切ってばかり致しておりましたものを)。さては、またいづこのあらはなるべきぞ(それをまた、何処から見られてしまうものでしょうか)」

と、*心をやりて言ふ(と女房は理詰めに言います)。　*「こころをやる」は＜心の憂さを晴らす。気晴らしをする。＞または＜得意になる。思うままに事をする。＞または＜心をその方にやる。思いをはせる。＞と大辞泉にある。この場面に即せば＜理屈を説く＞だろうか。

つつましげに降るるを見れば(用心深そうに降りる姫を見れば)、まづ(先ずその)、頭つき(かしらつき、髪型)、様体(やうだい、体型が)、細やかにあてなるほどは(ほっそりと上品な所は)、いとよくもの思ひ出でられぬ*べし(大将殿になら、とてもよく故姉君が思い出されてしまいそうなので)、　*「べし」の可能推量は、この時点では薫殿はまだ姫を見ておらず、この様子を見ていた女房目線で、薫殿の心情を推察した言い方、なのだろう。なお、この「べし」は結論語用ではなく認識語用であり、此処で文末構文とはならず、条件項構文となるので、句点ではなく読点で下文に続く。この事は次項ノートでも述べる。

扇子をつとさし隠したれば(姫が扇でぴったりと顔を隠していて)、顔は見えぬほど心もとなくて(顔が見えないのがもどかしく)、*胸うちつぶれつつ見たまふ(胸を詰まらせて御覧になることでしょう)。　*「胸うちつぶれつつ見たまふ」は敬語遣いなので主語は薫殿らしい。となると、是は薫殿が姫を実際に見ている、ということになって、実際には見ていない、と考えた私の見方が破綻する。しかし、それはやはり困る。設定配置が破綻すると文意自体が成立しないし、他に合理的な配置は思い付かない。それに本文にも、下に「四尺の屏風を、この障子に添へて立てたるが、上より見ゆる穴なれば、残るところなし」とあって、実際に薫殿が見たのは穴から覗ける範囲の、近くのごく狭い空間に限られるような言い方になっている。で、何とかこの文を推量意に見做せないかと考えたところ、上文の「べし」が目に付いた。「べし」は事物概念を一定の性質要素として定義し、その方向属性から一定の推移を予測する論理語なので、全体文意を推論に構文する特殊語用の場合がある、と考えてみる。と、上文に於いて、対象事物である姫君の性質要素は「細やかにあてなるほど」と修辞認識されているが、その認識は女房目線であり、その女房の認識を薫殿も共有していると見做すのは、あくまでも想定上の可能性の一つを論題しているのであって、だからこそ上文では「べし」と可能仮定視語用されているわけだ。その上で、その仮定認識に基づいて、主張すべき結論を予測する条件展開は、上文では未だ示されておらず、その論理展開は此処に「顔は見えぬほど」と条件提示されるのだから、此処で結ばれる薫殿の認識事情上の結論は可能仮定の推論範疇のままの文意である。かかる論理文に於いては、上文の「べし」は終止形だが文末を構文せず、性質認識の提示項を構文する仮定意を示す言い切りなので、此処では読点で下文に論理展開のあるを示し、構文上の文意としては前提条件の＜

○に於いては△となるので＞という言い方になり、場面想定の「顔は見えぬほど」という論理展開項を経て、結びの「見たまふ」と予測結論される。とでも言えば、一応は尤もらしい。今の内に目を瞑って先へ進んでしまおう。

*車は高く（いつもは妻戸口に板を渡して降りるものを、今回はその用意が無く、車の高さから）、降るる所は下りたるを（地面に降り下るのを）、この人びとはやすらかに降りなしつれど（同乗の女房たちは苦も無く降り遂せたが）、いと苦しげに*ややみて（姫君はとても不便そうに手間取って）、ひさしく降りて（長い時間を降車に要して）、*ゐざり入る（ようやく部屋に膝を進めて入って来ます）。*濃き袿に（紅花染めの上着に）、*撫子とおぼしき細長（撫子色だろうか薄紅色の細長を引いて）、*若苗色の小袿着たり（緑色の飾り上着を着ていました）。　*「車は高く降るる所は下りたる」は注に＜女車の場合は車の前板と簀子の間に打板を渡すが、その用意がなくて、いったん下りて簀子に上がった。＞とある。確かに、高低差があったり、勾配があって水平では無い状態での車への乗降は不安定な態勢を強いられて辛い。ただ、此処の場面では具体事情を詰めないと文意自体が掴めないので、改めて牛車の乗降を確認して置く。といっても、頼るのは偏に「風俗博物館」サイトの「牛車の種類」ページにある説明で、長文引用する。と、先ずは乗車に付いて「寝殿から車に乗るときは、中門廊の車寄（くるまよせ）に、牛をはずした車を後ろ向きに引き込む。車寄は廊の妻戸（つまど）に面しているので、妻戸を開けて牛車の後方から乗り込むのである。榻（しじ）という四脚の台を踏み台にして、車体の入口から外側へ付き出た踏板とよばれるステップに足を乗せる。横に立つ役の者が、入口に懸かった御簾（みす）をかかげてくれるので、その下をくぐって乗り込むのである。対（たい）の屋（や）の妻戸の前に、直接牛車を寄せて乗ることもある。」とあり、ついで降車に付いては「降りるときは、ふつうは前から降りる。まず車から牛を放ち、自分で前の御簾を巻き上げると、役人が車の前に突き出した前板というステップに履き物を置いてくれる。車が揺れるので両袖の傍建（ほうだて）という添え木に手を懸（か）けて履き物を履き、前の轅の間に置かれた榻を踏み台にして地面に降りるのである。」とある。「風俗博物館」サイトには参照図画像が豊富に掲載されていて文面以上に理解を助けられる。で、牛車は牛に車を引かせるので、車の台座に長い取っ手を二本固定接続し（ながえ、長柄か）、その水平高と牛の肩の高さとを合わせる為にくびれさせた渡し棒（くびき、曲木・首木か）と思われる部材が調整されているようで、その牛を繋ぐ長柄引き手は乗降の際には如何にも邪魔に思えるが、降りる時にはその引き手を地面に着けて車を前屈みにさせたらしく、それは実はとても不安定だったと思われる。だから、飾り物扱いの貴女装束は動きが不自由なので＜女車の場合は車の前板と簀子の間に打板を渡す＞ようにしたのだろう。が、それでも前から降りるのでは引き手が邪魔臭い。いっそ、乗る時と同じように、後ろ向きに車寄に付けた方が便利そうだ。が、それはともかく、此処では要するに一般的な降車方法のように、引き手を地面に着けて降りたらしく、私は姫に同情したい。　*「ややむ」は大辞泉に＜［動マ四］《「弥（や）病む」の意かという》ひどく悩む。思いわずらう。ますます苦しむ。＞とある。が、現代語の「やや」の語感は＜少々手間取る＞で、此処でもそれで意味は通るように思う。　*「ゐざり入る」は注に＜車から降りて後、浮舟は簀子から廂間へはいざって入った。＞とある。が、気になるのはむしろ、前の「ひさしく降りて」とこの「ゐざり入る」との間合いだ。文字で見ると、この間合いは「降りて」直ぐそのまま「ゐざり入る」ように読めるが、この「降りて」は降車の具体描写から離れて、「降り」という＜降車手順＞を済ませ「て」という事態推移を示す言い方、かと思う。「ひさしく」は「ややみて」を言い換えたもので、言い換えたという事は、降車場面の具体描写を終えて、いよいよ薫殿の臨場場面に視点が切り替わることを意味する。姫は実際には、降車して妻戸階段を昇り、中門廊を寝殿に向かって歩き進んで、庇の間を通って御簾内の部屋に着いたのだろう。で、薫殿目線から見れば、「ひさしく降りて」は＜ずいぶん待たされて＞であり、「ゐざり入る」は＜ようやく姫が部屋に入って来た＞のであって、その気分を感じなければ損をするが、かと言って、文自体は姫君が主語なので薫殿の事情で言い換えてしまうわけには行かず、「ひさしく」に＜ようやく＞と補語するのが限度だろう。なお、「居座る」は御簾の前や襖戸の前では座って、立ったまま入室しないのが礼儀作法だから、こ

れは普通の入室動作の説明であり、それを敢えて言うのは、薫殿がその姫の姿を実際に見た、という事を示す言い方なのだろう。　*「濃き色」は紫か紅を言うようで、此処では＜赤系統＞らしい。「袿(うちき)」は＜内着＞ではなく＜打ち着(羽織着)＞のことのようで、重ね着の一番上の着物らしい。　*「撫子」はピンク色。「細長」は裾を細長く後へ引きずるような飾り上着だったらしい。 *「若苗色(わかなへいろ)」は色見本サイトで見ると、ざっと緑。「小袿(こうちき)」は袿の上に着る、袖丈も着丈も短めの飾り着だったらしい。

*四尺の屏風を、この障子に添へて立てたるが(隣室には四尺の屏風を、この襖戸の前に添えて立ててあるが)、上より見ゆる穴なれば(薫殿が覗いているのは、その屏風の上から見通せる位置の襖戸の穴だったので)、残るところなし(丸見えでした)。こなたをばうしろめたげに思ひて(しかし姫君はこの襖側を不審がって)、あなたざまに向きてぞ、添ひ臥しぬる(背中を向けて、横になっています)。　*「四尺(ししゃく)」は一尺が 30cm 強として 120～130cm くらいで、座席の目隠しになる程度の高さだから、一時的な間仕切りに使う日常調度の屏風なのだろう。

「さも、苦しげに思したりつるかな(よほど難儀にお思いでしたでしょうか)。*泉川の舟渡りも、まことに、今日はいと恐ろしくこそありつれ(泉川の舟渡りも本当に今日はとても怖かったですからねえ)。*この如月には、水のすくなかりしかばよかりしなりけり(この二月には水かさが浅いので良かったのですけれど)」　*「泉川(いづみがは)」は大辞泉に＜木津川の京都府南部を流れる部分の古名。〔歌枕〕＞とある。「木津川(きづがは)」は＜三重県の鈴鹿(すずか)山脈南部に発し、京都府南部を流れて八幡(やわた)市で淀川に注ぐ川。＞とある。宇治橋西詰交差点から府道 15 号を西南下し、広野交差点で府道 69 号を左折南下し、城陽新池で国道 24 号に合流すると、そのまま泉大橋で木津川を越えるまで。国道 24 号は木津川沿いを走る。更に南下すれば直ぐ奈良県入りだが、長谷寺まではあとほぼ倍の道のりだ。是は一日行程だと相当な強行になるのではないか。二日行程だとして、この「舟渡り」が泉大橋あたりのことなら、その近くに一泊しての、早朝の川渡りだったのだろう。　*「このきさらぎ」は今年の二月で、ほんの二ヶ月前のことだ。何か特別な願掛けでもあっての参拝通いだろうか。費用も労力も要するので、そう気楽には出かけられないはずだ。

「いでや、歩くは(いや、出歩くことについては)、東路思へば、いづこか恐ろしからむ(東路を下ったことを思えば、畿内の何処が怖いもんですか)」

など、二人して苦しとも思ひたらず言ひゐたるに(などと老若の二人の女房は長谷寺通いを苦にせずに話していたが)、主は(しうは、姫は)音もせでひれ臥したり(一言も言わずに伏していました)。腕をさし出でたるが(かひなをさしいでたるが、腕を伸ばして袖から出ているのが)、まろらかにをかしげなるほども(まるまると可愛らしいのも)、常陸殿などいふべくは見えず(常陸殿などと地方官家風らしからず)、まことにあてなり(実に都会風です)。

やうやう腰痛きまで立ちすくみたまへど(薫大将はだんだん腰が痛くなるまで立ち姿勢を変えずにいらっしゃったが)、人のけはひせじとて(気配を悟られまいと)、なほ動かで見たまふに(更に動かずに見ていらっしゃると)、若き人(若い方の女房が)、

「あな、香ばしや(まあ芳しい)。いみじき香の香こそすれ(とても良い薫香の香りがします)。尼君の焚きたまふにやあらむ(尼君が焚いていらっしゃるのでしょう)」

老い人(老女房も)、

「まことにあなめでたの物の香や(本当に優れた焚き物の香りですね)。*京人は、なほいとこそ雅びかに今めかしけれ(都の人はやはりとても風流でしゃれていますねえ)。*天下にいみじきことと思したりしかど(奥方様は御自分を天下の薫物名人と自負していらっしゃったようだけれど)、東にてかかる薫物の香は、え合はせ出でたまはざりきかし(東国ではこうした練り香は、原料が入手できないので、調合出来なさらなかったようですね)。この尼君は(此方の尼君は)、住まひかくかすかにおはすれど(住まいはこのように質素でいらっしゃっても)、*装束のあらまほしく(衣類は立派で)、鈍色青色といへど(にびいろあをいろといへど、僧衣法衣と言っても)、いときよらにぞあるや(とても上質なものですよ)」　*「京人」は「きゃうびと」と読みがある。普通に使った言葉なのだろうか。音訓交じりだが、分かり難くは無い。　*「てんかにいみじきこと」は＜天下に名の知れている＝都でも有名だ＞で、話題が焚き物なので、是は＜都でも練り香の名人として有名だ＞という言い方らしい。で、「思したりし」は「東にて」という条件からして＜主語は浮舟の母北の方。＞と知れる、というのが注の指摘なのだろう。確かに、それまでの話題に無い人を登場させるのに、その主語を明示しないという語法は非常に分かり難い。その上に、「天下にいみじきこと」という分かり難い言い回しとは、悪口を言う気兼ねがあるにしても、雑だ。だがしかし、現代語でも、特に会話では、わざと主語を省く事で、曰く言い難い微妙な関係を表現することは普通にする語法だ。そう思うと、此処の文は、本当に当時の女房間の会話をそのまま写したような生々しさが示されているのかも知れず、それはそれで貴重な文に見えて来るから不思議だ。　*「さうぞく」はすべて薫殿からの支給品だ。

など、ほめゐたり(などと褒めていると)、*あなたの簀子より童来て(奥の縁側から御簾前まで童女が来て)、　*「あなたのすのこより」は注に＜薫の覗いている反対側。浮舟のいる方角。＞とある。「簀子より」ということは、童女は庇の間に入って来た、ということなのだろう。で、御簾内へは入らずに、御簾前で女房に言い伝えた、のだろう。

「御湯など参らせたまへ(お湯をお上がり下さい)」

とて、折敷どもも取り続きてさし入る(と言って菓子折りのいくつかも続けて持って来て御簾内へ差し入れます)。果物取り寄せなどして(老女は果物を近くに持ち寄って)、

「*ものけたまはる。これ(おひとついかがですか、これを)」　*「ものけたまはる」は「物承る」で＜ちょっと物をお伺い申します＝ちょっと如何でしょうか＞という言い方らしい。謙遜まで行かない丁寧表現のような語感なので、若女房よりは老女の言葉に聞こえる。

など起こせど(などと言って姫を起こすが)、起きねば(姫が起きないので)、二人して(女房たちが二人で)、栗やなどやうのものにや(栗などのようなものだろうかを)、ほろほろと食ふも(ぽそぽそと食べるのも)、聞き知らぬ心地には(聞き慣れない薫殿の耳には)、かたはらいたくてしぞきたまへど(見苦しく思えて目を離しなさったが)、またゆかしくなりつつ(直ぐまた見たくなって)、なほ立ち寄り立ち寄り見たまふ(更に何度も覗き見なさいます)。

これよりまさる際の人びとを(この姫より身分の高い女たちを)、*后の宮をはじめて(皇后の宮付き女官を初めとして)、ここかしこに(三条宮邸にも六条院ででも)、容貌よきも心あてなるも(姿の美しい者も気品がある者も)、ここら飽くまで見集めたまへど(薫殿は大勢飽きるほど見ていらっしゃったが)、おぼろけならでは(よほどの事が無いと)、目も心もとまらず(目も呉れず気

にも掛からず)、あまり人にもどかるるまでものしたまふ心地に(あまりに変人だと人に言われるほど冷淡でいらっしゃる異性観に)、ただ今は(此処では)、何ばかりすぐれて見ゆることもなき人なれど(特に何処と優れて見えることもない人なのに)、かく立ち去りがたく、あながちにゆかしきも(このように立ち去り難く、無性に好奇心が湧くのも)、いとあやしき心なり(実に奇妙な気分なのでした)。　*「きさいのみやをはじめて」は＜はじめて＞が＜はじめたてまつりて＞という敬語になっていないので、この「后の宮」は＜皇后自身＞のことではなく＜皇后に宮仕えする女官＞のことを言っているらしい。尤も、皇后は「これよりまさる際の人びと」として比較対照にすべき立場ではそも無いので、この「后の宮をはじめて」を＜「后の宮」をはじめて＞ではなく＜「后」の宮をはじめて＞と読むのは、文脈上は、それこそ初めから自明のことではあるのかもしれない。

[第三段　浮舟、弁の尼と対面]

尼君は(弁の尼は)、この殿の御方にも(この大将殿のお部屋の方にも)、御消息聞こえ出だしたりけれど(御挨拶を申し送って来たが)、

「御心地悩ましとて(御疲れという事で)、今のほどうちやすませたまへるなり(今は少しお休みになっていらっしゃいます)」

と、御供の人びと心しらひて言ひたりければ(と御供の者が気を利かせて応答無しを繕って言伝ていたので)、「この君を尋ねまほしげにのたまひしかば(殿はこの姫を得たいと仰っていたので)、かかるついでにもの言ひ触れむと思ほすによりて(この際に口説いてみようとお思いになって)、日暮らしたまふにや(日暮れまでは何も指図なさらないのだろう)」と思ひて(と思って御声が無いのを別に気にもせず)、*かく覗きたまふらむとは知らず(その実は殿がこのように隣室で此方を覗いていらっしゃるとは知らずに)、　*「かく」は近称指示語の「こ」の様態を形容説明する副詞語用であり、「覗きたまふらむ」の主語が薫殿なので、当文が薫殿目線で語られていることになり、同じ目線のまま下文に続くことから、この「知らず」の主語である尼君は、下文でも上文同様に主対象であり続けるので、この「知らず」は一次条件項を成す「思ひて」と並んで、二次条件項を成す連用中止法語用と見て、読点で下に続けるべきだ。

例の、*御荘の預りどもの参れる、*破籠や何やと(いつものように近隣の御荘園の管理人たちが大将殿に持って参った弁当や山菜類の差し入れを)、こなたにも入れたるを(弁たち山荘の住人用にも取り分があったのを)、東人どもにも食はせなど(東国連中にも食べさせたりなど)、事ども行なひおきて(諸手配を済ませて)、うち化粧じて(身繕いを整えて)、客人の方に来たり(弁の尼はこの客人の姫の部屋に遣って来ました)。*ほめつる装束(女房たちが褒めていた僧衣は)、げにいと*かはらかにて(なるほど実にこざっぱりとして)、*みめもなほよしよししくきよげにぞある(表情も今だに品があり穏やかでした)。　*「御荘」は「みさう」と読みがある。「御」は大将殿の所領を意味する。　*「破籠(わりご)」はスギやヒノキの薄板で作った折箱で携帯食料容器だから、ざっと弁当のことらしい。　*「ほめつるさうぞく」は注に＜浮舟の老女房がほめていた弁尼の装束。「げに」は垣間見している薫の納得の気持ち。語り手の視点と二重描写。＞とある。　*「かはらか」は仮名の漢字代用表記例では「かわらか」とされている語らしく、古語辞典には「かわらか」の項目で＜さっぱりしている＞とある。乾いて軽い、みたいな語感だろうか、と半疑問の補注がある。　*「みめ」は＜見た目＞で特に＜顔立ち＞を言うらしいが、古語辞典には＜ほまれ。みえ。面目。＞と

もあり、この老尼は特に美形とは語られて来ていないので、此処では＜表情＞と読んで置く。山荘暮らしで、気分だけは落ち着いていた、という事もありそうだし。

「*昨日おはし着きなむと待ちきこえさせしを(昨日お着きになるものとお待ち申しておりましたが)、などか、今日も日たけては(如何して今日に、それもこんなに日が高くなってから)」　*「昨日おはし着きなむ」は昨日の内に一行が初瀬から帰るだろうと弁尼は思っていた、ということらしく、となると宇治までは一日行程が普通だったことになりそうで、昔の人はずいぶん早足だったように思えてくる。牛車でも、速い車だと振動も激しく大儀だったような気がするが、今と違って移動の基本が歩きだったのだから、健脚が普通だったのかも知れない。

と言ふめれば(と弁が言ったようなので)、この老い人(老女房が)、

「いとあやしく苦しげにのみせさせたまへば(姫がどうも弥にお疲れの御様子だったので)、昨日はこの泉川のわたりにて(昨日は泉川の近くで一泊し)、今朝も*無期に御心地ためらひてなむ(今朝も遅くまでお休みになっていらっしゃいましたので)」　*「無期に(むごに)」は＜際限なくずっと＞ということらしい。だから、姫が遅くまで出発せずに此処への到着が遅れた、という言い訳のようだが、「泉川のわたり」が泉大橋のことなら、宇治まで半日くらい掛かるのは普通のような気がするが、どうも私の時間感覚に本文とのズレがあるようだ。

といらひて(と応えて)、起こせば(姫を起こすと)、今ぞ起きゐたる(やっと姫は起きました)。尼君を恥ぢらひて、そばみたるかたはらめ(尼君に遠慮して身をそばめている姫の横顔が)、これよりはいとよく見ゆ(大将殿からは良く見えます)。まことにいとよしあるまみのほど、髪ざしのわたり(本当にとても風情ある目元や髪の生え際が)、*かれをも(故姉君をも)、詳しくつくづくとしも見たまはざりし御顔なれど(子細にじっくりとは御覧にならなかった御顔だが)、これを見るにつけて、ただそれと思ひ出でらるるに(この姫を見ていると、そっくりだったように思い出されて)、例の、涙落ちぬ(大将はまた感傷に涙します)。　*「かれをも」は注に＜故大君をさす。＞とある。分かり難いし、看病もしていたのに顔を良く見ていないというのは、有り得るのだろうが、意外に感じる。

尼君のいらへうちする声、けはひ(尼君の応対に出す姫の声や感じは)、宮の御方にもいとよく似たりと聞こゆ(妹君にも良く似ているように大将には思えます)。

「あはれなりける人かな(印象深い人であることよ)。かかりけるものを、今まで尋ねも知らで過ぐしけることよ(このような人を今まで居るとも知らずに過ごして来たのか)。これより口惜しからむ際の(こんな受領の家柄より卑しい身分の)*品ならむゆかりなどにてだに(少しでも血縁のある遠縁の者でさえ)、かばかりかよひきこえたらむ人を得ては(これほど故君に似通った人を得たなら)、おろかに思ふまじき心地するに(粗末にしない気がするのに)、まして、これは(ましてこの人は)、*知られたてまつらざりけれど(故宮に認知しては頂けなかったものの)、まことに故宮の御子にこそはありけれ(故宮の御実子なのだから)」　*「しなならむ」の「品」は＜血筋＞のようだが、「ならむ」は「なるらむ(相当する可能性がある)」の短縮音便だろうから、「品ならむ」は＜辛うじて血縁のある＞という言い方、かと思う。　*「知られたてまつらざりけれど」は注に＜父宮から認知していただけなかったが、の意。

＞とある。故宮への敬語と姫への無敬語から、こういう言い方になるようだ。難しい言い方をするものと感心もするが、廃れて当然のややこしさ、みたいな印象も受ける。

　と見なしたまひては(と思ってみなさると)、限りなくあはれにうれしくおぼえたまふ(大将はこの姫の存在をこの上なく有難く嬉しく思いなさいます)。「ただ今も(今すぐにでも)、*はひ寄りて(このまま此処から、姫の側に寄り添って)、『世の中におはしけるものを(生きていらっしゃったんですね)』と言ひ慰めまほし(と言って喜びたい)。*蓬莱まで尋ねて、*釵の限りを伝へて見たまひけむ帝は、なほ、いぶせかりけむ(蓬莱山にまで楊貴妃の御霊を探させて、かんざしだけを形見に受け取った玄宗皇帝は、やはり物足りなかっただろう)。これは異人なれど(この姫は故君とは別人だが)、慰め所ありぬべきさまなり(生身の女であってみれば、どんなにか悲しみを癒すことが出来そうだ)」とおぼゆるは(と感じられるのは)、この人に契りのおはしけるにやあらむ(大将がこの人に前世からの宿縁がおありだからなのでしょう)。　*「はふ」は「這ふ」ではなく「延ふ」で＜このままここから＞という言い方なのだろう。　*「ほうらいまでたづねて」は注に＜以下「ありぬべきさまなり」まで、薫の心中。『白氏文集』「長恨歌」にうたわれた玄宗皇帝と楊貴妃の故事を思い起こして比べる。＞とある。　*「釵の限りを伝へて(かんざしのかぎりをつたえて)」は、道士が蓬莱山に居た楊貴妃の霊から金のかんざしだけを形見に持ち帰った、という長恨歌にある故事のこと。

　尼君は、物語すこしして、とく入りぬ(尼君は姫と話を少しして直ぐに奥へ入りました)。人のとがめつる薫りを(女房たちが気付いた香りを)、「近く覗きたまふなめり(大将が近くで覗いていらっしゃるようだ)」と心得てければ(と分かったので)、*うちとけごとも語らはずなりぬるなるべし(長居を避けて、混み入った話はせずじまいにしたようです)。　*「うちとけごと」は初瀬寺参りをした事情や道中の土産話などだろうか。何も薫殿に隠し立てをする必要などなさそうに思えるが、混み入った話を誤解されては後が面倒だというような配慮か、予断を持たれるのも興醒めみたいなことなのか、もっと即物的に自分の長居で薫君の覗きが暴露る危険性を避けたか、とにかく事無きを図ったようではある。

［第四段　薫、弁の尼に仲立を依頼］

　日暮れもていけば(日も暮れて行くと)、君もやをら出でて(大将君も静かに御簾内を出て)、御衣など着たまひてぞ(御着物などをお召しになって)、*例召し出づる障子の口に(いつも控室にお使いになる御曹司の襖戸口に)、尼君呼びて、ありさまなど問ひたまふ(尼君を呼んで、姫の様子などをお尋ねなさいます)。　*「れいめしいづるさうじのくち(殿専用の部屋の入口)」とは何処なのか。そも、この山荘の見取り・間取りははっきりしないので、分かる筈も無い。が、「この寝殿はまだあらはにて」(九章一段)と寝殿が新築されたばかりとあり、その他に侍所や倉庫や下人小屋などはあっただろうし、台所や女房の曹司もあって、それらを繋ぐ幾つかの廊下もあって、また建て替え中は薫殿は弁に「この寝殿は、変へて造るべきやうあり。造り出でむほどは、かの廊にものしたまへ」(七章三段)と言っていて、寝殿以外は残したものも多そうだが、橋姫巻などの話では元の寝殿の西側を八宮が、東側を宇治姫姉妹が使っていたように思われ、対屋は無かったような印象だ。で、九章一段での「北面になむ」に従えば、関東勢に西中門廊に近い侍所を使わせて、薫殿の従者は台所の近くに、北側の通用門詰所兼家司控室みたいなところがあったとして、其処を使い、その近くの廊下部屋の御曹司を薫殿が専用の控室にしていた、みたいな配置が一考される。

「折しもうれしく参で逢ひたるを(都合良く落ち合えたが)。いかにぞ(首尾はどうだ)、かの聞こえしことは(私が相談した、かの姫を貰い受けたいという話は)」

とのたまへば(と薫殿が仰ると)、

「しか、仰せ言はべりし後は(そのように御相談があった後は)、さるべきついではべらば、と待ちはべりしに(良い折があれば話を着けよう、と機会を伺っておりましたところ)、去年は過ぎて(こぞはすぎて、去年は折も無く過ぎて)、この二月になむ、初瀬詣でのたよりに対面してはべりし(今年の二月になって、初瀬詣での時期に対面致しましてございます)。

かの母君に、思し召したるさまは、ほのめかしはべりしかば(先方の母君に御話の向きは、伝え知らせ申しましたところ)、いとかたはらいたく(とても恐縮に感じる)、かたじけなき御よそへにこそははべるなれ(勿体無い御縁でございます)、などなむはべりしかど(などと申しておりましたが)、*そのころほひは(その二月当時は)、のどやかにもおはしまさずと承りし(内親王とのご結婚でお忙しいと承りましたので)、折便なく思ひたまへつつみて(時機を得ないと遠慮いたしまして)、かくなむ、とも聞こえさせはべらざりしを(此方の事情はこうした状況です、ともお聞かせ申せませんでしたが)、またこの月にも詣でて(かの姫はまた今月にも初瀬に詣でて)、今日帰りたまふ*なめり(今日帰っていらっしゃったのです)。　*「そのころほひ」は注に＜薫は女二宮と婚儀の頃であった。＞とある。　*「なめり」は此処では推量ではなく丁寧表現。

行き帰りの中宿りには(姫が行き帰りの休憩所に)、かく睦びらるるも(当邸をこのように親しまれるのも)、*ただ(単に)過ぎにし御けはひを尋ねきこゆるゆゑになむはべめる(故宮を偲んでのことのようです)。かの母君も、障ることありて(母君にも他用があって)、このたびは、独りものしたまふめれば(今回は姫君だけがいらっしゃっていますので)、かくおはしますとも(殿がこうしてお見えになっていても)、何かは、ものしはべらむとて(婚儀の御話しは、何とも進めようが無いかと、存じます)」　*「ただ」には違和感がある。既にこの二月に受領家母娘には源氏大将殿からの婚意が弁を介して知らされているのであり、その時期が大将と内親王との結婚の最中であったことは「天の下響きて」(八章三段)いたのだから、この母娘も当然にその事情を承知しており、別の時期に此方の結婚話は再考を図りたい、というのが当時の母娘と弁との合意だったに違いない。だから、仮に今回の初瀬詣でが、それ自体の願掛け事情に起因していたとしても、この機会に殿との接遇を企画しない筈はなく、現にこうしてその段取りは組まれていて、今や正に引き合わせの直前なのである。つまり、この場面が実質でお見合い会場であることは、当事者および関係者各位に於かれては周知されている。しかし相性確認は未だ出来ていないので、この時点では婚儀が整わない事態は大いに有り得る。そこで、双方を傷付けない予防策として、面と向かってのお見合いの席では無く、偶々接遇したという背景事情を演出設定することにしたのだろう。その言い訳方便がこの「ただ」であり、母君の不在なのだろう。母君にしてみれば、天下の大将に会えるものなら会いたいという気持は当然にあっただろうが、此処は一番、娘自身の運命に任せる売り込み事情のために自制した、のかもしれない。大将はこの弁の弁を、そういう意味に理解した、と読んで置く。ベンベン。

と聞こゆ(と弁は答え申します)。

「田舎びたる人どもに(田舎じみた者どもに)、*忍びやつれたるありきも見えじとて(近衛の大将が、人目を忍んで出歩く地味な姿を知られまいと)、口固めつれど(従者や家の者には口封じしたが)、いかがあらむ(上手く行くものだろうか)。下衆どもは隠れあらじかし(下人たちは大将風を隠し切れまい)。*さて、いかがすべき(となると、どう話を進めたものか)。独りものすらむこそ、なかなか心やすかなれ(姫お独りなのが、却って親しめる)。かく契り深くてなむ、参り来あひたる(このように深い縁があったから、私たちは今日此処で回り逢えたのだ)、と伝へたまへかし(と姫に言って下さい)」　*「忍びやつれたるありきも見えじ」は＜身分を隠したい＞だから、国家中枢を担い、延いては国体を体現する近衛大将が、私事では普通の人物だという実体を見せるのは、国家の権威を損ない、以て国家秩序を乱す、という責任感からという言い方も出来るが、むしろ日常的には普段着で気楽に国家中枢に出入りする余裕を身近な周囲の者には示す、というのが雲上人の生活実態であり、自分は偉ぶらないが取り巻きの護衛官などが他者を威圧する、という形態が様式化さえされているのだから、そしてその様式の頂点が近衛大将であってみれば、この「口固め」は従者たちに、この姫とは身内筋の私事で会うのだから相手方に高圧的な姿勢を見せるのは控えろ、と命じたことになる。しかし、その実、薫殿が右近衛府大将であることは相手方も承知していて、非常に緊張しているとは述べられている。姫の警戒は当然なのであり、むしろ世慣れた風の二人の側近女房があまりにも近衛大将の地位の高さを知らなさ過ぎるのだろう。尤も、大将の偉大さの実感など私も皆無だが。　*「さて」は直接は「下衆どもは隠れあらじかし」を受けて、この見合いを＜全く非公式なものにも出来ない＞という事情だが、その前に、弁が言った「かの母君も、障ることありて、このたびは、独りものしたまふめれば」も受けていて、同時に＜公式の体裁は整っていない＞という事情も踏まえるので、この「いかがすべき」は＜待遇交渉までは進まないが、正式な結婚申し込みとして挨拶する＞くらいのことになりそうだ。が、薫殿は既に姫を覗き見ていて、大いに乗り気になっているから＜厚遇は約束するから早く話をまとめたい＞というのが本音で、「いかがすべき」と客観視し冷静に判断しようとはするものの、今日が初見とは言え、挨拶などに止まらず、是非親密に話したい、という気持が先走って「独りものすらむこそ、なかなか心やすかなれ」と言ってしまったし、それは弁も母君も、この姫をしてなら、と計算尽くのことだったのだろう。

とのたまへば(と薫殿が仰ると)、

「うちつけに(初めてなのに)、*いつのほどなる御契りにかは(いつの間に深くなった御縁なのでしょう)」　*「いつのほど」は薫殿が姫を＜覗き見している内＞であり、そのことを弁も気付いていると暗に仄めかした言い方なのだろう。

と、うち笑ひて(と弁は笑って応えて)、

「さらば、しか伝へはべらむ(ではそのように申し伝えます)」

とて、入るに(と言って御簾内に入る時に)、

「貌鳥の声も聞きしにかよふやと、茂みを分けて今日ぞ尋ぬる」(和歌 49-24)

「面影も 声を頼りに 探し当て」(意訳 49-24)

*注に＜薫の独詠歌。『集成』は「もとは鳴き声から来た名で、かっこうの別名とするのが有力であるが、この歌も「顔」に思いを寄せて「声も」と詠んでいるように、平安時代には字面から美しい鳥とする理解が生じたようであ

る」。『完訳』は「「かほ鳥」はかっこうか。亡き大君に、顔・声が特に似るところから表現。面影の人を捜し求め、彷徨の末、尋ねあてた感動」と注す。『河海抄』は「夕されば野辺に鳴くとてふかほ鳥の顔に見えつつ忘られなくに」（古今六帖六、かほどり）を指摘。＞とある。「貌鳥(かほどり)」が＜美しい鳥＞という言う方だけだとしたら、此処で「貌鳥の」と詠い出す情緒は特に示されていない、ことになるのだろうか。何か常陸路にまつわる下話がありそうな気がするが、専門家に分からないことが私に分かる筈も無い。だから、歌筋だけでこの歌を見れば、「かほどり」は＜顔取り←顔立ち←(故姉君の)面影＞を追う気持を、「尋ぬ(たづぬ、逃げた鳥を探す)」という場面に置き換えて、「聞きしにかよふやと(聞き覚えのある声を便りにして)」、内親王を迎え入れる「茂みを分けて(間隙を縫って)」、「今日ぞ尋ぬる(やっと探し出した)」とは恩着せがましい。尤も、薫大将は「茂みを分けて」という言い方で＜隠れて見た→覗き見を白状した＞ようでもあり、弁が言った「うちつけ」に対する反発として、自分の覗き見は故姉君を慕うあまりに止むに止まれぬもので、非難や愚弄されるに値しない真剣なものだ、とでも言った心算なのかも知れず、であれば如何にも、是は姫への贈歌ではなく、弁への抗弁でしかない。いずれこの異母妹の件は、確かに最初は対の御方が振った話とは言え、すべては薫殿の一人芝居だ。

ただ口ずさみのやうにのたまふを(という歌を大将殿がただ思い付きのようにお詠みなさったのを)、*入りて語りけり(部屋に入って姫にも話したのです)。　*「入りて語りけり」は姫への贈歌とも思えない大将の歌を、弁は敢えて姫に伝えた、ということなのだろう。つまり、薫殿の覗き見を姫に暴露した、という意味だ。ただ、具体的に如何ということではなく、殿はあなたの様子を少し見ていたようですよ、くらいの言い方ではあったかもしれないが。

(2013 年 9 月 30 日、読了)